

各関係機関・団体の長 殿（様）

鹿児島県病害虫防除所長

平成17年度技術情報第12号（カンキツかいよう病）について（送付）

このことについて、下記のとおり取りまとめましたので送付します。

.....
平成17年度 技術情報第12号

今年はカンキツかいよう病の発生が多くなる可能性が高いので、下記の点に留意し、発生初期の防除指導に努めてください。

記

1 対象作物 カンキツ

2 対象病害虫 カンキツかいよう病 (*Xanthomonas campestris* pv. *citri*)

3 情報の根拠

- (1) 昨年6月に春葉で多発し、その後の発生面積率も平年に比べて高く推移した。10月の巡回調査では、春葉での発生ほ場率が73%（平年40%）と過去10力年で最も高く、発病葉率も2.9%（平年2.8%）と平年より高かったため、伝染力の強い潜伏越冬病斑が多く残っていると考えられる（図1，図2）。
- (2) 向こう1ヶ月の天候は曇りや雨の日が多く、降水量は平年並か多いと予報されている。若い葉は気孔感染により感染が拡大するので、特に3月の降水量が多いとその後の春葉における発生ほ場率は高くなる（図3）。
- (3) 平成17年の発生は平成16年秋季の台風被害により、越冬病原菌の密度が高くなったことと、発芽期以降の断続的な降雨が主な要因と推測される。

4 防除上注意すべき事項

- (1) 若い葉の感染は気孔感染が主体で、病原菌密度が高くなると防除効果が上がりにくいので、発芽直前の防除を重点に行う。
- (2) 本年の発芽期は平年に比べて10日程度早くなることが予想されている。発芽直前の防除適期を逸した場合や、収穫時期が発芽期と重なり防除できない中晩柑類では、発芽期の防除でも効果が高いことが近年の研究で実証されているので、春季の防除を必ず行う。
- (3) 発芽期の防除について登録のある薬剤は、コサイドDF 1,000～2,000倍のみである。
- (4) 銅水和剤の使用にあたっては薬害軽減のため、炭酸カルシウム剤300倍を必ず加用する。
- (5) 罹病しやすい品種や、昨年、発生が多かったほ場では、防除後も新たな病斑が見られる場合には、発生に応じて追加防除する。
- (6) 葉が硬化してくると風傷からの感染が多くなるので、防風垣や防風網を整備する。

(参考資料)

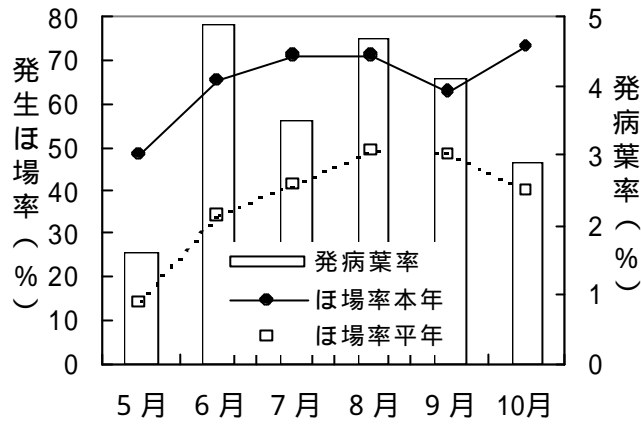


図1 カンキツかいよう病の発生経過 (平成17年)

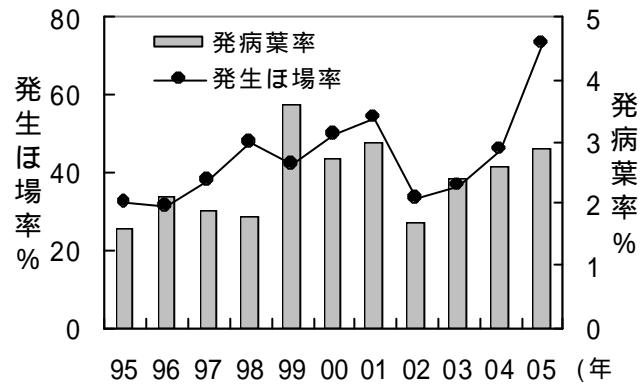


図2 カンキツかいよう病の年次推移 (春葉：10月)

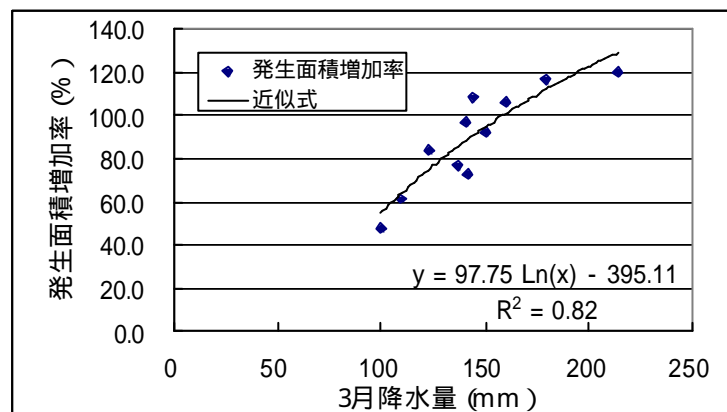


図3 3月の降水量と6月の発生面積増加率との関係

注1) 計算に用いた発生ほ場率は病害虫防除所調査による平成6～17年の年毎の県平均値

$$\text{発生面積増加率 (\%)} = \frac{\text{春葉での発生ほ場率 (6月)}}{\text{旧葉での越冬病斑ほ場率 (3月)}} \times 100$$